【 学校便り 10 月　H2609119　】

『だいじょうぶ・・・？』

授業中に校舎の中をまわり、いろいろなクラスの様子を見てまわっているとたくさんの言葉が、たくさんの気持ちと一緒に、耳に、心に、飛び込んできます。

優しい言葉や怒った言葉。楽しい言葉や悲しい言葉。いろんな言葉が聞こえてきます。そのたびに、子どもどうしの関わりに思いをはせ、毎年この話をさせていただいております。ご容赦ください。

これは、友だち同士、心を通い合わせ教室の中で生活しているからこそ出てくる優しさ、親しみ。逆になかなか心が通い合わずにすれ違い、怒ったり、傷つけあったり・・・。

そんな、各クラスの中のいろいろな人の関わりがあるから、プラス言葉やマイナス言葉。それこそ人の数だけいろいろな言葉が聞こえてくるのでしょう。

人と人との関わりが深まると助けられたり助けたり、あるいはいがみ合ったりけんかしたり、そんな中で人の気持ちを理解し、人に対する気遣いの大切さに気づき、人を思いやる心も育っきます。人を気遣う気持ちのあらわれが『ありがとう』『ごめんなさい』という言葉ではないかと思うのです。

そして、そんな関係がさらに深まってきたとき、初めて相手を思いやる言葉、『大丈夫？』という言葉、が出てくるように思うのです。

自分のことばかりでなく、人のことも気遣うことのできる子を育てることが、「かしこさ」という生きた知識、『知恵』を育むことになるのです。知識の量ではなくそれを正しく使い、人を思いやることのできる子を育てることが、今の社会の中で最も優先されるべきことなのだと思うのです。

日常の、ごくあたりまえの出来事の中で、周囲の人の様子にも目を向け、そして何気なく心を配る。「心配」とは、人に心を配ること、思いやりのシャワーです。

さて、月曜朝会でこんな話をしました。

――――――　今日は「だいじょうぶ？」、というお話をします。

先週のある日、いつものように朝、東門の方のかどでみなさんを迎えていました。たくさんの子が元気にそして笑顔で『おはようございます。』と挨拶をしていきます。そこへいつも元気に声をかけてくれる１年生の女の子が来ました。いつもと違い元気がないように思いました。「今日はお姉ちゃんは一緒じゃないの。」と聞いてもうつむいて具合が悪そうです。そして、そのまま行き過ぎたので、ちょうどそのあとに来た６年生の女の子に、「あの１年生の子がちょっと具合が悪そうなんだけど…。」と、途中まで言いかけると、その６年生の子は、すすっと１年生の方へ走って行き、軽くとんとんと肩をたたき、「だいじょうぶ・・・・・。」と声をかけてくれました。そして、６年生に連れられて学校の中に無事入って行きました。誰であろうと、困った人がいたら「だいじょうぶですか？」と声をかけて、手助けしようとするこの女の子はすてきですね。人のことをいつも気にかけて大切にしてあげられる心はとっても大事です。この気持が、チームワークのもとになるのですよ。

自分も一生懸命やるけれど友だちのことも大切にして、大丈夫？と優しく見つめながら協力する。これが桃五の子どもたちのいいところ。そうこれがチームワーク。心をひとつにして、すばらしい運動会にしたいですね。

桃五のみなさん。だいじょうぶ・・ですね。
お話、終わりまぁす。　　――――――――
さて、このような「やさしさ」「心配り」のできる子は、顔を見ても、言葉を聞いても、ゆったりとゆとりがあります。そしてそれは、その子自身が他の人から『優しさ』『心のシャワー』をたくさん浴びているからだ、と思えてならないのです。
この 6 年生の女の子のように、誰かの「やさしさ」「心くばり」が一人の誰かさんを優しく元気にし、その誰かさんの中で大きくなった「やさしさ」が言葉になって次の人を元気に、優しく包む。心配りのリレーだと思うのです。大人も子どももありません。
子どもが、さみしく、人を傷つけるような「言葉」を、「行動」をとる時、それは、『その子が』・・・・・なのではなく、『その子に』誰も優しさを伝えていないのでしょう。
子どもたちの輝きに支えられているはずの私たち、でも育み育てる心をたがえるととんでもないことにもなりかねません。
みんなの支えあればこそ子どもたちは輝くのです。子どもたちの輝きと微笑みは、社会のたゆまぬ努力の賜なのだと思うのです。
『だいじょうぶ・・？』と、人を思いやる優しさはみんなの宝物。なくさないように、大人も子どももなく、みんなで大切に育てていきたいと思います。